

60周年記念連載③

AI×技能×教育が描く“新しい学びのかたち” — AI が語る「職業大」10年後のシナリオ（前編）—

職業能力開発総合大学校 基盤整備センター 多々良 敏也

作成支援：GPT-5（生成 AI）

1. はじめに：AI が語る未来の「学び」

ChatGPT をはじめとする生成 AI の登場は、社会の構造を根底から揺るがしている。その変化は産業や経済だけでなく、「学び」のあり方にも波及し、職業教育や訓練の現場に新たな問いを突きつけている。“AI に何を任せるのか、何を人が担うのか。”

この境界線をどう描くかが、今後の人材育成の本質的課題となる。

かつて技能は「身体知」として継承されてきた。だが、AI が人の観察・分析・予測を担う時代、技能は再び定義し直されつつある。

本稿では、AI をモデレーターとする仮想討論を通じて、「AI × 技能 × 教育」が描く新しい学びのかたちを考える。登壇するのは、政策研究、産業技術、教育学の3分野を代表する架空の専門家たち。実在の機関名や個人名は仮想設定であり、議論内容は AI による生成的シミュレーションに基づくものである。

2. 討論内容：AI 時代の学びと技能の再構築

2.1. 第1セッション：AI 時代の職業能力開発

最初のテーマは、「AI 経済戦略と職業能力開発の接点」。

内閣府の経済研究官をモデルとした仮想登壇者・

山口氏は、OpenAI の“Japan Economic Blueprint”を引き合いに出しながら語った。「この構想は単なる技術導入ではなく、“AI を国家成長の中核に置く社会設計書”です。職業能力政策も、従来の“技能維持”から、“AI と共に価値を創出できる人材”への転換が求められています。」

経済成長の主役が「モノ」から「人と AI の協働」へと変わる中、職業能力開発は新たな段階に入っている。つまり、AI を使いこなす技能者を育てるだけでなく、『AI を活用して訓練の設計そのものを再構築する「実験の場」』が必要とされているのだ。

一方、産業界代表として登壇した佐藤氏（中堅製造業 技術本部長）は、現場のリアルを踏まえた視点でこう語る。「中小企業の現場では、AI はまだ遠い存在です。でも、熟練者の作業データを AI で可視化し、教材化できれば、技能継承の標準化が可能になります。AI は職人の敵ではなく、“技能の翻訳者”になれるんです。」

AI が「技能を奪う」のではなく、「技能を翻訳し、次の世代へつなぐ」存在へ。この認識の変化こそ、産業界が AI 時代を前向きに捉え始めた証しといえる。

教育研究の専門家・高橋氏（国立教育政策研究所をモデル）は、議論をさらに深めた。「AI リテラシーを教えるだけでは足りません。職業教育が目指すべきは、“AI を教育の共働者にする”ことです。たとえば、職業訓練指導員が AI と協働し、学習履歴

を分析して訓練計画を設計する。その提案を人が吟味し、改善していく。これがAI時代の教育力です。」

AIを“共に学び、共に考える存在”として位置づける発想は、教育のパラダイムを大きく変える。

この第1セッションを通じて、討論は「AIをどう教えるか」から「AIとどう共に学ぶか」へと軸足を移していった。

このセッションの核心は、教育そのものをAIと共に再設計していく視点にある。つまり、AIを教材や分析ツールとして使う段階を超え、学びの仕組み自体をAIと共有し、進化させていく動きである。この流れを示すキーワードが、“メタ教育”だ。教育現場はいま、「知識を伝える場」から、学びを創り出す場へと進化しつつある。

2.2. 第2セッション：技能の再定義

続くテーマは、「AI時代の技能再定義」。

WEF（世界経済フォーラム）の『Future of Jobs Report 2025』によれば、2030年までに約4割のスキルが入れ替わるとされている。

山口氏はこの点について、次のように指摘する。「スキルは“固定的な職務能力”ではなく、“変化に対応する力”へとシフトしています。教育機関は、AIを活用して“これから生まれる技能”を先取りし、学び直しのモデルを作る必要があります。」

一方、現場の佐藤氏は、技能の本質が“作業”から“判断”へと移行していると語る。「AIが異常を検知しても、止めるか進めるかの判断は人が担います。つまり、いま問われているのは、“AIと協働して判断する力”なんです。教育現場では、AIリテラシーだけでなく、“判断力を技能化する”訓練が必要です。」

高橋氏もまた、「生成的スキル (Generative Skills)」という新しい概念を提示する。「これからの職業教育は、課題を自ら定義し、AIと共に仮説を立て、他者と共創して解決していく力つまり、“生成的スキル”を育む方向に進むべきです。職業訓練指導員自身がAIを使ってカリキュラムを再設計できるようになることが、次世代の“教育力”になります。」

こうして議論は、「スキルを教える」から「スキ

ルを共に生成する」方向へと展開していく。その過程で浮かび上がったのは、AI時代の職業能力開発が三層構造で進化していく姿だった。

視点	再定義されるスキルの本質	教育機関に期待される役割
経済政策	変化対応力=学び直す能力	データでスキルを動的設計
産業現場	判断の技能化= AIとの協働	実践的 AI 訓練モデルの開発
教育研究	生成的スキル= AI と共創	指導員教育の再設計

技能とは本来、状況に応じて変化し、進化する“生きた知”である。AIの導入によって、スキルが「静的な職務要件」から「生成的な能力循環」へと変わり始めている。

教育機関がこの変化を先取りできるかどうかは、カリキュラムよりもむしろ教育設計者（指導員）自身のリスキリングにかかっている。

つまり、AI時代の教育の鍵は、「教える力」ではなく「学びを設計し直す力」へと移りつつあるのだ。

3. おわりに：AIと共に学びを“再発明”する時代へ

AIが社会を変える時代、職業能力開発もまた「静かな革命」を迎えている。AIは技能を奪う存在ではなく、人の知恵を拡張し、新たな学びを生み出す共働者になり得る。

後編では、討論の最終セッション「職業大の次の10年」を取り上げ、“職業能力開発のR&D化” — 教育と産業をつなぐ実験拠点としての未来像を探る。

〈参考文献〉

[1] OpenAI, 『Japan Economic Blueprint 2025』, OpenAI JAPAN, 2025.
[2] World Economic Forum, 『The Future of Jobs Report 2025』, World Economic Forum, 2025.
[3] 内閣府, 『統合イノベーション戦略2024— AI 戦略・人材育成関連部分—』, 内閣府 総合科学技術・イノベーション会議資料, 2024.
[4] 厚生労働省『第11次職業能力開発基本計画（令和3年度～令和7年度）』, 職業能力開発局, 2021.

〈付記〉

本稿で扱う仮想討論の内容は、生成 AI（OpenAI GPT5,2025）により作成された架空の発言を基に筆者が再構成したものである。